

「20回あたりから先がいい」の法則

★

「読書百遍義自ら見る（どくしょひゃっぺんぎおのずからあらわる）」というのがある。この意味は、「百回も繰り返し読めば、本が言わんとしていることが自然と分かるようになる」ということ。熟読の大切さを教えている。百回も読めば、難解な本を相手にしても「あ、そういうことか、分かった！」と膝を叩き小躍りする瞬間が訪れる。これまでの人生で、回数は少ないが、このことを実感したことがある。ところで、もう何十年も前、祖母に「読書百遍意自ら見る」と教えられ、今日ネットで調べるまで、「義」と「見」を間違えて覚えていた。（ちなみに何をネットで調べたかという「遍」の漢字。情けない。）

★★

ハインリッヒの法則というのがある。もう80年も前にアメリカで発表されたもので、「一つの重大な事故・災害の陰に29の軽微な事故・災害があり、さらにその背後に300の“ひやり・はっと（したこと）が隠れている」というもの。何万件もの労働災害の事例を研究して導き出された数字で、1：29：300の法則とも呼ばれる。いい数字、という実感がある

この法則が教えることは明快で、「ひやり・はっとを減らせば、それに応じて大きな事故の発生も減らすことができる」ということ。様々な組織・現場の労務管理や安全管理に欠かせない考え方だ。

1：29：300の比率は、実は万能選手ではなかろうか？例えば、一つの業種で成功して大金持ちになった人が1人いたとする…タコヤキ屋とか。その場合きっと、29のちょっと儲かっているタコヤキ屋があり、300の普通のタコヤキ屋があるにちがいない。コンサル業界は、まさにそんな感じ。わが社は当然300のグループに入る。「ゴキブリは、1匹見かけたら30匹潜んでいる」なんてホイホイのテレビコマーシャルがあったが、1匹見つけたら、その部屋の中に30匹、家全体では300匹ということかもしれない。

法則を発見したハインリッヒさんは、当時、損害保険会社の技術・調査部の副部長だったそうだが、このように何でも科学してしまうアメリカの、その部分だけは結構好きだ。

★★★

これまでの経験から（科学していないが）、「20回あたりから先がいい」の法則がありそうだ。例を示すと次のようなこと。（これって何回あたりから先がよくなる？と聞いてみよう。）

- 女房の陶芸の先生（故人）が、「自分の窯をもったら、それで20回焼いたころから窯の癖が分かるようになり、火の調整ができるようになる」と言っていた。
- 英語の勉強で、「家出のドリッピー」とか「スピードラーニング」とか20回くらい聞くと、なんとなく聞こえるようになる。他人が書いた論文の英文サマリーを20回くらい書き写すと、これまたなぜか、「英語ってこういうことなのね」と理解したような気分が訪れる。
- カレーライスも、20回以上作ると美味しく作れるようになる。よその家のカレーも、全然違う味だが美味しい。（だから、漬物でもなんでも、おふくろの味にはかなわない。）
- 自治基本条例づくりの住民ワークショップは、20回くらい回を重ねたあたりから、参加者においていろんなものが共通理解されるようになり、話がまとまり始める。
そうだ、これからは、「熟議とは、とにかく20回だ」と言うことにしよう。
- 20回も一緒に酒を飲めば、その相手のことはだいたい分かる。10回じゃ、少ない。